

マイノリティをめぐる「語彙」と「文脈」

芝正夫と「福子」

山田 巖子

Vocabulary and Context of Minorities : Masao Shiba and Fukuyo

YAMADA Isuko

はじめに

- ①『福子の伝承』の発想
 - ②『福子の伝承』の生成
 - ③芝正夫の戦略
 - ④「福子」をめぐる文脈
 - ⑤「宝子」をめぐる文脈
 - ⑥「福虫」をめぐる文脈
- まとめにかえて

【論文要旨】

「障害」をもつ子どもが、家に福をもたらすという、いわゆる「福子」「宝子」の「伝承」は、大野智也・芝正夫によつて、民俗学の議論の俎上に載せられた。この「伝承」はこの著作以前には、ほとんど記述されていない「伝承」であった。そのため、一九八一年の国際障害者年を契機として、新たに「語り直された」「民俗」であるという批判があった。筆者は、まさに「民俗と世相——『烏譚なるもの』をめぐる——」と題する小稿の中で、このことばの「読み替え」は、「障害」を持つとされる「子ども」の保護者の間で、一九七〇年頃には既に起こっていたこと、問われるべきは、このようなことばが「伝承」として可視化され、語るに足るものとして捉えられるという、認識上の変化・変質の方ではないかと論じた。

本稿では、この問題の残された課題について検討した。まず、この本の作者の一人、芝正夫という人の研究の背景について示した。東洋大学で民俗学研究会に属し、卒業後、障害者福祉関係の仕事に就いていた芝は、「障害」を持つ子の親の手記から「福子」「宝子」

ということばを知り、このことばのマイナスの語義を知りつつも、「障害」を持つ人々が地域に当たり前に暮らすことを可能にすることばとして、再生させようとした。その結果、このことばを「昔の人の知恵」「伝承」として、人々に提示してみた。

次に「障害者」としてラベリングされる以前に、「福子」や「宝子」ということばが、どのような文脈に置かれたことばだったのかを考察した。「障害者」という概念のもとに、集まってきたことばが、「愚か者」「役に立たない者」「家から独立できない者」という語義を持つことばであったことを示し、「障害者」とは別種のカテゴリーであったことを示した。これらのことを明らかにすることで、①「伝承」や「民俗」という枠組みを、目的のために戦略的に使う人物（芝正夫）が民俗学的「知識」の形成に関与したこと、②「障害者」をめぐる認識のかわりめにあつて、過去の別種のカテゴリーにあったことばが、かつての文脈を失つて再文脈化したこと、を示した。

【キーワード】 語彙、福子、障害者、単身者、マイノリティ、再文脈化

はじめに

民俗学の歴史を考える際に、民俗学的な知識を一般社会が受容してゆく過程や、民俗学的な知識が、新たに現実を構築してゆくという動きを考察の外に置くわけにはいかない。また、そのような「知識」の「形成」や「流通」に、民俗学者以外の多様な人々が関わったことも記録されていかなければならない。

心身の「障害」など、何らかのマイノリティとしての特徴をもつ子どもが、家に福をもたらすという、いわゆる「福子」「宝子」の「伝承」は、大野智也・芝正夫によって、民俗学の議論の俎上に載せられた（大野・芝 一九八三）。この「伝承」は、大野・芝両氏の著作以前には、民俗学関連の著作や資料にはほとんど記述されない「伝承」であった。そのため、一九八一年の国際障害者年を契機として、新たに「語り直された」、いわば捏造された「民俗」であるという批判があった（香西 一九九九）。

筆者は、「民俗と世相―『烏譚なるもの』をめぐる―」（山田 二〇〇九）と題する小稿の中で、このことばの「読み替え」は、「障害」を持つとされる「子ども」の保護者の間で、一九七〇年頃には既に起こっていたこと、問われるべきは、このようなことばが「伝承」として可視化され、語るに足るものとして捉えられるという、認識上の変化・変質の方ではないか、と論じた。また、この問題は、近代以降の社会的な少数者をめぐる制度やまなざしの変遷史の中で考えるべき問題であると述べた。

先の小稿では、①明治以降の優生学的な思想の浸透と制度が整えられていく過程における、「烏譚」「たくらた」などと呼ばれていた、「愚か」とされる者へのまなざしの変質、②一九七〇年代以降の「障害」を持つとされる子どもの保護者による「ことば」の再解釈、という枠組みを示

した。

本稿では、この問題の残された課題について検討したい。まず、「福子」を主題化した『福子の伝承』の作者、芝正夫氏という人の研究の背景について示したい。このことは、在野の学としての民俗学に関わった多様な人々の素養や志の一端を明らかにすることにつながると考える。また、芝の発想やその著書の流通の問題は、民俗学的な「知識」の受容の一端を考えることにつながると考える。

次に「障害者」としてラベリングされる以前に、「福子」や「宝子」ということばが、どのような文脈に置かれたことばだったのか、いくつかの記録を示して考察したい。これは「福」や「宝」ということばを引き寄せる、多様な人々がいたことを資料に戻りながら論じることになる。

本稿において、現在の人権感覚に鑑みて、許し難い差別的な表現や、読者に不快感を催させる表現を、話し手のことばや文献の引用の形で用いる場合がある。本稿では、そのような我々の感覚の変化自体を対象化するものであるため、敢えてそのままの形で示した。意のあるところをお汲み取りいただきたい。

①『福子の伝承』の発想

まず、最初に『福子の伝承』の作者、芝正夫とはどのような人物であったのか、確認してゆきたい。

一九八三年に刊行された『福子の伝承』は、大野智也、芝正夫の両名が著者となっている。拙稿「民俗と世相」で既に述べたが、芝は、「障害者」の保護者のことばとして、「福子」「宝子」ということばに触れ、それを「民俗」の「伝承」として位置づけようとした。

『福子の伝承』の「あとがき」には、芝が同書をまとめたと思った

際に、日本短波放送在職中に福祉番組の取材・製作経験があった大野智也を訪ねた、とある。したがって「福子」を「福祉」と結びつけたのも芝であるといえる。

芝正夫は一九九一年に脳溢血のため四一歳の若さで亡くなった。芝の遺稿と追悼文をあわせた『父親が娘を殺す話―女人犠牲譚から福祉民俗学へ―』が、芝の友人たちの手によって編集され、岩田書院から刊行されている（『芝正夫遺稿集刊行会編 一九九三』⁽¹⁾）。同書の巻末には、津山正幹、浅野均両氏の「芝正夫年譜」が付されており、これによって芝の著作と仕事を知ることができる。芝の著作物についてはおおむね、同書を頼りに示していきたい。

年譜によれば、芝は一九五〇年に千葉市に生まれ、一九六〇年に、東京都墨田区押上に転居した。一九七〇年に東洋大学社会学部応用社会学科に進学し、大島建彦が指導する民俗学研究会に入部している。

一九六〇年代後半には、民俗学のブームが起き、いくつかの大学にサークル活動として民俗学研究会、いわゆる「民研」が誕生していた。この国の民俗学を支えた組織の中に大学の民俗学研究会があったことは、民俗学史の中に書かれなければならない歴史の一つであるといえる。カリキュラムの中にある「学問」ではなく、学生の自主的な活動として、報告書が刊行されてきたこと、卒業生の多くはアカデミズムとは離れた場所での職を得ながらも、何らかの形で民俗調査と関わってきたことは民俗学の「運動」の歴史として記録されるべきものであろう。

芝は在学中に民俗学研究会の調査に参加し、『旧静波村の民俗―岐阜県恵那郡明智町旧静波村―』（一九七一年刊）『長柄町の民俗―千葉県長生郡長柄町―』（一九七二年刊）『田中川村の民俗―岩手県東磐井郡大東町旧中川村―』（一九七三年刊）『柏尾の民俗―栃木県上都賀郡栗野町旧柏尾村―』（一九七四年）の四冊の調査報告書の刊行に携わり、いずれも「信仰」の項目を記述している。

一九七四年に大学を卒業した芝は、協栄物産株式会社に入社するも翌年には退社し、社会福祉法人全日本精神薄弱者育成会⁽²⁾に転職する。

芝は卒業後も、東洋大学民俗学研究会のOBたちが創設し、のちに大学を越えて広く民俗学に関心を持つ人々が集うことになる古々路の会⁽³⁾に参加し、民俗学と接点を持ち続ける。古々路の会は、合同調査を実施して会誌にその調査報告を掲載しているが、機関誌には会員の随想なども掲載するという、『民間伝承』などの雑誌に通じるようなスタイルを保っている。

芝はこの会の会誌に、一九七七年から断続的に調査報告や随想などを寄せている。建築儀礼の縁起として知られる女人犠牲譚、中山太郎の『日本民俗学辞典』⁽⁴⁾の復刻版の紹介⁽⁵⁾などに芝の関心のありどころが見てとれる。

芝が、「福子」ということばを最初に活字にしたのは、この『昔風と当世風』誌上であった。一九八一年の第二二号に、「福子思想・その他―精神薄弱者と民俗についての覚え書き―」（『父親が娘を殺す話』に「福子思想」として再録）を掲載している。芝は「障害」を持つ子どもの保護者の手記から、「障害」のある子を「福子」「宝子」などと呼ぶ事例があることを知る。芝は、ここで、民俗学への関心と自身の職業の「接点」⁽⁶⁾が「福子」を「民俗学の観点から地域福祉につらなっていくであろう問題」として捉える視点につながったと述べている（『芝正夫遺稿集刊行会編 一九九三 七四頁』）。

しかし、この原稿では、「福子」を基点に、民俗学の既存の問題群との関連が随想風に列挙されているだけで、「地域福祉」という「結論」には着地していない。今、試みに整理してみると、①神が憑依しやすい者、②因果応報思想、③厄介者と「やつし」、④水神小童、⑤片目片足の不具神、⑥遍路などの「家」から洩れた者、⑦オジ、オバと呼ばれる単身者、に分けられる。このうち、その後、単行本となる『福子の伝

承』では、この問題は、①、④にひきつけて論じられた。また、単行本刊行後は、主に④、⑤の文脈で引用されてきた〔香西 一九九九〕。筆者もまた、この問題を④の問題群とともに考察してきた一人であるが、それと同時に、しかし、「障害」の有無ではなく、⑦の問題に考慮すべきであることも指摘してきた〔山田 一九九三〕。このことは後述する。

芝の遺稿集編纂の中心となった津山正幹は、この稿の章のタイトルとなっている「欠けたもの、意味のないもの」ということばに注目している。⁽⁷⁾

芝は、いびつな形の十円玉を、「神棚にあげておこう」と考えた、自身の経験から説き起こし、いびつ―えびす―笑みす、恵比須（福の神）―蛭子（不具神）―福笑い（おかしなものが福を招く）、と連想をつなげてゆき、次のようにまとめている。

…略…正常でないものを神棚に上げてしまうということが、わたしたちの頭に自然に湧いてくるのは、考えてみれば不思議な心理機制であるとおもう。〈神様にしてしまう〉ということが、正常のらち外に置いてしまうという意味を濃厚に含みつつ、そういうものを大事にすると福が訪れるということを内包している。…略…〔芝正夫遺稿集刊行会編 一九九三 七六―七七頁〕

津山は、この「欠けたもの／意味のないもの」とされてきたもののへの関心や愛着が、芝に通底するテーマであったのではないか、と述べている〔芝正夫遺稿集刊行会編 一九九三 二〇六頁〕。

ここで確認しておきたいのは、次の三点である。「福子」ということばに立ち止まった芝には、「地域福祉」という観点からこのことばを捉え直す眼があったこと、しかし、それにとどまらず、この問題には他の民俗学における問題群と響きあう問題が内包されているという認識が

あったこと、「福子」の問題には、いびつなものを「正常のらち外に置く／大事にする」という両義的な意味あいが含まれるという認識があったこと、である。

芝は「福子思想」を発表した同じ一九八一年に、全国社会福祉協議会編・発行の『月刊福祉』六四卷一〇号から一二号に「働ける精神薄弱者をまちに出していくための試み」と題する論攷を（上）（中）（下）に分けて発表し、「地域福祉」の枠組みでの実践的な方途を模索していたことも付言しておくべきであろう。

②『福子の伝承』の生成

「芝正夫年譜」によれば、一九八三年に芝は社会福祉法人全日本精神薄弱者育成会を退職し、堺屋図書を興す。ここから『福子の伝承』刊行への本格的な準備が始まる。

一九八三年三月二〇日刊行の『西郊民俗』第一〇二号の巻末に月例談話会の記録が掲載されている。同年一月一六日の第三六八回の記録に芝正夫の名がある。芝の名前が『西郊民俗』に見えるはじめてのものである。この時、芝が「福子の問題」と題する発表をしたことが記録されている。

この時に芝は、障害のある子どもを「福子」「宝子」などと呼ぶことを民俗学の問題として取り上げたいという希望を語り、先行研究として挙げたのが、『民間伝承』一七卷五号掲載の笹谷良造「幸福を齎す白痴」であった。

笹谷は、アルフォンス・ドオデエの『アルルの女』を紹介し、その中に「うちの中に馬鹿が一人いることは家の守護になる」という一節を紹介する。そして、

特にこれを取り上げたのは、私がかつて大和の五条（西部吉野の奥地へ入る唯一の入り口で、重要な交通路にあたっている町）に暫く住んでいた頃、その付近では白痴が生まれると家が栄えるといっていやがらなかった。そしてそういう家が二件あったのを聞いていたからである。私はこれを知ったのは十年ほど前であったが、その後も多少気をつけていたものの、私の乏しい経験ではこの問題を取り扱ったものは見かけず、ただ北陸地方にも、この種の俗信があるらしい事を知つたに過ぎなかつた。⁽⁸⁾

と記している。「北陸地方にも」と言うのは、柳田國男「たくらた考」の

北陸処々の海岸地方では、村の白痴を大事にする風習が近い頃まであつた。その理由はこの者が死ぬと鯨に生まれ替わつて、浜に寄つて村を富ませてくれるものと信じて居たからださうである。つまりは人間はさう無意味に、馬鹿になれるものでないように思つて居たのである。⁽⁹⁾

という一節を指していると考えられる。芝が探しうる民俗学の先行研究としては、わずかに笹谷と柳田のものがあつただけ、といえるかもしれない。しかし、実際にはこれらに先行する一九三九年に、小島勝治が『浪華の鏡』四巻二号に近畿地方の事例を中心に紹介した「福子」を著している（小島 一九八四 三〇九～三一二頁）。

芝は談話会の際に主催者の大島建彦や参加者から助言を受け、「福子」「宝子」のアンケート調査にとりかかつたと考えられる。アンケートの実施は『福子の伝承』によれば、二月初旬から三月初旬にかけてである（大野・芝 一九八三 一六頁）。同年二月二〇日の西郊民俗月例談話会で

芝は「福子調査の成果」を発表し、アンケートの中間報告を発表している。この時の発表レジュメでは、回答者ごとに事例がまとめられており、栃木県から広島県までの一七の事例が表に示されている。

この研究会に参加していた筆者は、同じく参加者の一人であつた久野俊彦氏とともに自身が知る事例を示した。この時の久野氏の示した栃木県の事例と筆者が示した兵庫県の事例（後述）は、研究会の席上で、口頭で教示された資料という注記はなく、『福子の伝承』のアンケート結果の中を含めて記載されている。

さらに六月一九日刊行『西郊民俗』一〇三号の巻末によれば、四月の第三七一回の談話会で芝は「福子の伝承」と題する発表を行っている。これが最後の発表であつた。

この時の報告は、福祉教育研究会編『わかるふくし』五二号（一九八三年三／四月号）に発表した「なぜ『福子』なのか―民俗学者らへのアンケート調査を中心に」が配られ、説明された。この時のアンケートの事例は五一例であつた。談話会に参加していた筆者のメモが手許にある。「差別意識の濃い地域にフクゴ・タカラゴの名称あり」「水俣病で生まれてきた子どももタカラゴと呼ぶ⁽¹⁰⁾」「福助足袋の本社は大阪の堺」「見世物」「オジ・オバ」「オジボウズ」⁽¹¹⁾などと書かれている。議論の中心は、単行本で芝が強調するような「地域福祉」に活かず、といったものではなく、この「伝承」を成立させる背景や「負の意識」に集中していた、といつてよい。

その後刊行された『福子の伝承』の後書きは六月二一日、アンケート実施からおおよそ三ヶ月後である。同書は同年七月二〇日、芝の立ち上げた堺屋図書から刊行された。異例のスピードで書き上げられた書籍であつたといえよう。

③ 芝正夫の戦略

芝はアンケートの実施に際して、依頼文を次のようにしたためている。

精神薄弱の子を持つ親御さんの手記等をみると、その子をさして、「福子」「福虫」「宝子」等といっていることがあるのをたまた目にします。これは、ひとつには、そういう子だからといって粗末に扱うのではなく、家の中にその子の席を与えてやり、大事に育てようという心の現われかと思われまます。

しかも、そればかりではなく、こうした考え方が、昔からのいいつたえ（民間伝承）々としてあった（ある）のではないかとおもわれる形跡があります。

したがって、もし、かつてこういう考え方があったのだとしたら、この意味の掘り起こしは、親の心の発見であり、ひいては、地域福祉の心にもつながっていくことでもあり、また、障害を持つてゐるがゆえの偏見をときほぐしていく一助ともなると思うのです（大野・芝 一九八三 一一～一二頁）。

この依頼文に、著者らの意図が記されていることを香西豊子は問題視し、「調査者の意図にそぐわない事実（たとえば障害者差別など）は、最初から報告されなかった可能性がある」（香西 一九九九 八七頁）と批判する。しかし、このような調査が最初から、何の意図もなくなされ、その結果が流通してよいと考えるほど、芝はナイーブではなかった。「ある一定の方向付けをされて広く知れ渡ること」（香西 一九九九 八七頁）が最初から意図されていたのである。

一九八三年に『わかるふくし』に掲載した「なぜ『福子』なのか」に

は、芝は、『福子の伝承』には敢えて書かなかったことを記している。

「差別の一形態あるいは差別を温存してきた風土があったことの証拠でもある」「いいくるめようと思えば黒にもなるし、白にもなる」「生の資料（この場合、悪い資料は捨ててしまってもいい）は資料でおいおい、このいいつたえをプラスの方向に評価し、転化し、有効に使いうる手はないだろうか」（芝 一九八三年 一五頁）。

芝の実施したアンケートには、回答者にこの「伝承」への感想も求めていたのだが、同稿の中で芝は、次のような回答者の「感想」を紹介して、この論攷をしめくくっている。

：略：その当事者、関係者はそんなまやさしい考えで生き抜くことはできないのですから、あまりこういう考え方、いい方は好ましいことではないと思います。少しもなぐさめにならないのですから。（広島県豊田郡・親・M氏）

障害者を役に立たない人間として、うち捨ててきた過去に、障害者を「福子」「宝子」といつて陰でかばう人もいたという現実があったことは、逆にいえば、障害者（児）を抱えた家族などに如何にひどい蔑視があったかを物語っていると思う。（広島県世羅郡・親・K氏）（芝 一九八三 一八頁）

これらの感想は、単行本『福子の伝承』の中にも収められており、ことばを生み出す状況の複雑さを示している。そのような状況をよく承知の上で「あえて」や、「それでも」ということばで、芝は『福子の伝承』を世に送ったといえる。

「障害」の有る無しにかかわらず、すべての人が地域社会の中でごく普通の生活ができることを理念とするノーマリゼーションということは

が、日本で初めて使われたのは、花村春樹によれば、一九七四年のことであったという⁽¹²⁾。しかし、日本ではこの時期は、一九七一年からの社会福祉施設緊急整備五か年計画が実施され、「重度障害者」の「大量収容施設」建設が進められている時期であった。「障害者」が「地域」から離れようとした時代であったといえる。芝が『福子の伝承』の着想をした時、芝は、この理念を日本のことばで根付かせることを考えていたといえるのではないか。それは、芝がこの言葉を「障害」を持つとされる人々の保護者から知ったことと関わりがあろう。芝が手にした一九七〇年代の保護者の手記には、「世間」の人々の心ないことばに傷ついた母親が、身近な人から「福子」「宝子」といったことばを聞いて励まされたり、慰められたりする経験が綴られていた（大野・芝 一九八三、山田 二〇〇九）。

大野智也は、『福子の伝承』第三章「宝子という心―地域福祉の観点から―」で、第二次世界大戦前まで、地域の中で、雑事をこなしながら生きていた人々の記憶を掘り起こしている。このような話は、聞き取り調査という構えでなくても、現在でも年配の人々から聞くことができる。筆者の聞き取り経験では、それは、話題になった時にはじめて「そういえば」と思い出される種類のことであった。それらが回想され書き止められる時には「美談」の形を示すが、もともとは日常の中に埋め込まれていたもので、記録されることもなかった種類のことであるといえる。

例えば、仙台市に本社を持つ地方紙『河北新報』⁽¹³⁾は、一九九七年三月一五日のコラム「河北抄」に次のような記事を載せる。

六〇代半ばの仙台育ちの方がいった。「母から聞いた話ですけど、仙台四郎⁽¹⁴⁾みたいな人は、当時、結構いたんだって。坂の下にいて大八車を押したり、お葬式ときには必ず呼ばれて働いたりしたそう。昔の人は、そのたびにきちんと彼らにお礼を言って、手間賃を

払ったっていうんだね。これって本当の福祉じゃないかい」

この談話は、「六〇代半ば」の人によって、「福祉」という形で捉え直されているが、ハンディ・キャップのある人が地域の中で生活していたという母親の記憶が回想されている。

大野と芝は、何らかのハンディ・キャップがある人も地域の中で暮らしていることが当たり前である状態を、人々の記憶から探ろうとしていたといえる。芝は「福子」「宝子」ということばはそれらの記憶を喚起するキーワードになり得ると考えたのであろう。

これらのことばが、保護者の心を支えたのは、それは高邁な思想や大所高所から出たことばではなく、市井の人から「昔からの知恵」として発せられたことばだったからであらう。

香西は、「民俗学の中ではむしろ歓迎され、あえて発掘された伝承も、欧米に端を発する福祉思想からすれば、人権を蹂躪する思想とも映りかねない」（香西 一九九九 一〇二頁）と「欧米に端を発する」思想の立場に立つのであるが、芝が求めていたのは、日本の、同時代の「世間」に抗していくことばであった。その際に、これらの「ことば」は、「障害者」の主体性が考慮されておらず、あくまでも「障害者」を抱える健常者の立場に立った「ことば」でしかないのではか、といった批判は容易に想定し得る。しかし、本書がそもそも「障害者」の保護者の投書から着想されたものであること、また、その投書がなされた時代の条件を考え併せなければならない。拙稿で既に述べたが、一九六五年に「障害者」を施設に囲い込む「コロニー構想」が出されてから、「障害者」が地域から切り離され、それぞれの家庭で子どもを抱え込まざるを得なくなる状況の中で、このことばが「伝承」として浮上してきたのである（山田 二〇〇九）。

しかし、地域の人々がハンディのある人々を支えていた記憶を掘り起

こすというⅢ章と、ハンディのある子どもを「家の守り神」とするというⅠ章の「福子」の事例は実は結びつかない。後者は家の中に子どもを留める論理であり、家の外に出していく論理ではないからである。そのような矛盾も含めて、「美談」の装いをまとして『福子の伝承』は刊行される。芝は、この「伝承」が必ずしもプラスの意味ではないことを充分承知の上で、また、流通させる上では、このマイナスの意味を強調するのは危険であると考えた上で、この本を刊行したといえる。「この本は事例をせいぜい集めただけのもので、資料集といっていいくらいのもんです。」とりあえずの目的は、こういうことがあった、こういう事実があるということを実際に投げ出すことにあります。「お読みになった方々が、この本を有効にお使いになることと、またご叱正を期待します。」と芝は後書きに記している(大野・芝 一九八三 二〇六頁)。

芝は、この本に実践的な効力を期待し、また、学問としてはのちには、資料が集積され、修正されてゆくべきものと考えていたといえるのではない。津山正幹は本書を「この本は我々民俗学徒に対して書かれたものではないと思えてしかたがないのである。資料は、民俗学の研究者から受けても顔はこちらを向いていない。」と評している(津山 一九九一 一五頁)。津山がいうように、芝は、この本を民俗学の本として出版したのではなく、この本を流通させるために「民俗学的」な枠組みを用いたのではない。それは、「民俗学」という制度を利用した、とも言い換え得るかもしれない。

④「福子」をめぐる文脈

芝は、前述したように、『福子の伝承』のアンケートの協力を依頼する際に、「福子」に類似することばとして、「宝子」「福虫」という語彙を挙げている。芝はこれらのことばを最初から「精神薄弱」や「障害」

と結びつけており、アンケートでは、それに沿う回答が寄せられているのであるが、中にはそのようなカテゴリーからははじれる答えも混じっている。

これらの回答の背景にはさまざまな文脈があると考えられるが、語彙と語義を示し、類似の語彙の知識の有無を問うアンケートという方法では、語彙が置かれている文脈を読みとることはできない。

また、これらの回答に対しては、「福」や「宝」という語彙自体が、「物語」を作りだす喚起力を持つていることにも注意を払うべきである。西田耕三は寺社縁起などの縁起の生成について、縁起を生み出すことばに注意を向け「単語が文脈を構成する、文脈になりたがる性向を持つている」(西田 二〇〇六 六六頁)と述べている。「福」や「富」もまた、西田のいう「文脈になりたがる」単語の一つといえよう。

人々は声の記憶や文字、図像から、「福」や「宝」をめぐる物語群のストックを持つている。その結果、芝のアンケートは、「福」や「宝」ということばが、「家」や「子ども」とどのように結びつくのか、回答者の「連想ゲーム」のような様相を呈するのである。つまり、芝の問いかけに対して、回答者が、①既知のものからふさわしいものを探してくる、②既知のものを、「問いかけ」にあわせて再解釈する、という二種類の対応が起こっているといえる。もちろん、これらの「想起」はたった一つのものが念頭に置かれるのではなく、いくつものことば、文字、図像などから引用され、重ねあわせられていくものである。また、語彙と語義が別々のところから引用される場合もある。

「福子」とそれに類する「伝承」は、資料が脆弱なことが香西氏によって批判されている。ここで資料数そのものについて確認しておきたい。社会福祉法人宛に九九通、民俗学関係者二五〇通、計三四九通のアンケートを実施し、回答数が一二四、有効な事例として五四例の事例を得ている。この事例に、既刊資料や口頭での情報提供など、アンケート以外で

入手した事例六例をあわせて、六〇例の事例が示されている。回答者が複数の事例を知るものもまとめて一例として処理しているために、地域の分布数と事例数は一致していない。また、芝はここでは、回答者が「負の伝承」と答えたものも事例として紹介している。また、資料としてカウントしなかったものも参考資料の形で提示している。⁽¹⁵⁾資料の数としては脆弱であることは認めざるを得ないものの、香西が批判するように、マイナスのものを「隠蔽」とするというほどの態度は見られない。芝の執筆の仕方には、「考えるための材料の収集」「問題の登録」という側面が強かったといえる。

ここでは、やや辛抱強く、語彙を生み出す錯綜する文脈を解きほぐしていくことにしたい。前述したように、語彙と語義は一対一対応ではないため、語彙には複数の文脈が入りこんでいるが、ここでは便宜的に語彙ごとにその文脈を検討してみる。

最初に「福子」の事例を検討してみたい。なお、「福子」と「フクゴ」の表記の使い分けは、筆者の使用に関わるものは「福子」、典拠のある場合は、それぞれの典拠の表記に従う。「宝子」、「福虫」も同様とする。

「福子」の名称で回答が挙がっているのは、栃木県那須郡、足利市、東京都小平市、山梨県西八代郡、岐阜県大垣市、愛知県名古屋市中区、大阪府大府市、堺市、奈良県大和郡市、五條市、兵庫県神戸市、三木市、鳥取県鳥取市、広島県尾道市、福山市、豊田郡（現三原市）、香川県仲多郡、三豊郡（現三豊市）、愛媛県新居浜市、福岡県行橋市、山口県、佐賀県伊万里市である（大野・芝 一九八三 八四～八九頁）。

回答者は、「福子」という語彙を知らない場合、その語彙から連想する語彙を答えている場合がある。

例えば、京都市、奈良県大和郡山市の回答者は、「福子」に類似することばとして「福助」を挙げている。長野県上伊那郡や上田市でも、それぞれ、「両足の短い人」「頭の大きい人」を「福助」と呼んでいる（大

野・芝 一九八三 八六頁、八五頁）。また、京都市、広島県豊田郡（現三原市）、佐賀県伊万里市の回答者が「フクゴ、タカラゴ、フクムシ」などの語彙は「頭の大きい人（子ども）」を指すという回答（大野・芝 一九八三 八六、八八、八九頁）や、兵庫県神戸市の回答者の「フクゴ、タカラゴ」ということばは「商売などがうまくいくと（そのように引用者注）」などの回答（大野・芝 一九八三 八六、八七頁⁽¹⁶⁾）もまた、「福助」の図像や「伝承」を考慮しなければならない。

「福助」については既に拙稿の中で「福子」との関わりについて考察した（山田 一九九三）。福助は、江戸後期に流行した、大頭の小男の名前であり、そのモデルには諸説がある。しかし、これらの回答者の「福助」の記憶は近世的なものの残存ではなく、明治以降に新たに意味づけし直されたものであることは既に述べた。

近代以降の「福助」は、一八九二年（明治二五）に、大阪で出版された花廬舎静枝著『大丸騒動綾錦都乃花衣』^{（はなのや）}において大丸百貨店の「祖」として描かれている。また、一九〇〇年（明治三三）には、足袋装束商「丸福」が「福助足袋」と商標を変更している（木村 一九九四）。このように「福助」は、百貨店の縁起の中で再生し、その図像は、福助足袋の商標として靴下とともに流通した。

福助に見世物との結びつきを説く説があるように「異形のものを見る」ことが招福につながるという観念は近世期の見世物に見られる観念であった（川添 二〇〇〇）。「福」はしばしば「富」と結びつけられ、その去来は人智の及ばないものがあるとして、さまざまな説話を産んだ。また、禍福は容易に転換するものであるという認識が、その根底には存在していた（山田 一九九三）。富の移動や家の盛衰と子どもとの間に因果関係を見いだす話は一七世紀以降、唱導話材としてもはやされた。借金を返さずに死ぬと、貸し主が次の世で借りた者の子どもに生まれ変わってきて散財するという、中国の「鬼索債」「投債鬼」説話は、江戸

後期の日本で、子どもの「障害」や放蕩の因果を説く話として再生した「堤 一九九、二〇〇四」。この説話は、他の民間の説話群とも結びついて、「現実にあったこと」としてしばしば「世間話」として人々の口にのぼった（山田 一九八八）。

例えば筆者は二〇〇三年九月一三日に大阪府の一九六八年生まれの男性から次のような話を聞いた。この男性は、筆者の「福子」をめぐる口頭発表を聞いた際に、この話を思い出したという⁽¹⁷⁾。

一九二九年生まれの母親は、大阪ミナミ（中央区と浪速区に広がる繁華街）辺りで、次のような話を聞いてきた。親が前世に悪いことをすると、「障害」のある子どもが生まれてくる。しかし、その子のために一所懸命働くので、お金は家に残る。そのような子どもはお金ができると亡くなるので両親自体は幸せに暮らす。

この男性は、この話は、母親一人の勝手な解釈だと思っていたという。この話は、文脈の違う二種類の話が引用され解釈し直されているといえる。前半は金銭や罪業と子どもとの因果関係を説く説話群であり、後半はマイノリティとしての特徴を持つ子どもの去来が富の移動と関わるという物語群である（山田 一九九三）。

「福子」という語彙にまつわる「伝承」については、江戸後期以降の見世物の文脈と、富と子どもの因果を語る唱導話材の浸透、福助の図像の流通などの、文化的な蓄積を考慮に入れなければならない。

⑤「宝子」をめぐる文脈

ここでは「宝」という語の文脈について考えてみよう。

（表 1）は、『福子の伝承』の中から、宝ということばに関わる回答を抜き出したものである。

表によれば、山形県上山市、秋田県大館市、栃木県下都賀郡、新潟県

表 1 「宝」をめぐる語彙一覧

タカラモノ	山形県上山市辺り	社会的能力が乏しく、独立して生計を営むことなく一生その家に所属している者
タカラモノ	秋田県大館市	主として知恵遅れ 戦後まで 商家
オタカラ	栃木県下都賀郡壬生町	知恵遅れだがよく働く人 現在もいう
タカラゴ	新潟県北蒲原郡中条町（現胎内市）	家のためによく働く二、三男 少し知恵が足りなくておとなしく家のいうなりに働く二、三男で分家を出す心配がない者
タカラゴ	山梨県西八代郡市川大門あたり	おし、つんぼ 現在もいう 家の経済の手助けとなるから
タカラゴ	兵庫県氷上郡氷上町三原（現氷上市）	心身障害者
タカラゴ	広島県広島市東区牛田本町	大きな頭で首が据わらず、寝たきりの人。金持ちになると生まれることがある。昭和 10～15 年に母から聞く。
タカラゴ	広島県豊田郡本郷町（現三原市）	脳性小児マヒ児 家の苦痛を一心に背負っているから 祖母から聞く
タカラゴ	広島県世羅郡甲山町（現世羅町）	障害を持って生まれた子 こんな子は大事にしなければいけない 昭和 20 年頃まで
タカラゴ	長崎県佐世保市東浜町	知恵遅れ 小児マヒ 大切に育てれば家が栄え財産もできる 父母より聞いた 現在もいう
タカラゴ	長崎県長崎市北栄町	なんらかの障害者

北蒲原郡（現胎内市）、新潟県三条市、山梨県西八代郡、兵庫県水上郡（現丹波市）、広島県広島市、同県豊田郡（現三原市）、同県世羅郡、長崎県佐世保市、同県長崎市から「タカラモノ、タカラゴ、オタカラ、タカラオジ」などの回答があったことが分る。このうち、タカラオジについては、「福虫」の事例と併せて第六章で考察する。

『日本国語大辞典』⁽¹⁸⁾には、「宝」の語義として「家の厄介者。怠け者。無能者。卑しめていう語」と記載があり、「宝」がこの意味を持つ地域として、宮城県仙台市、神奈川県藤沢市、岐阜県本巣郡、長崎県対馬、熊本県下益城郡、大分県大分市、大分郡が挙げられている。また、「宝物」の意として、「家の厄介者。怠け者。無能者。卑しめていう語」とあり、青森県上北郡、三戸郡、岩手県九戸郡、気仙郡、宮城県栗原郡、仙台市、秋田県、山形県、福島県大沼郡が挙げられている。

このように見てくると、タカラモノが「家の厄介者」という意味として定着している地域には、「障害のある子ども」を「宝子」と呼ぶことが、「そういう子だから」といって粗末に扱うのではなく、家の中にその子の席を与えやり、大事に育てようという心の現われかと思われます⁽¹⁹⁾〔大野・芝 一九八三〕というような解釈と結びつくことは難しいと考えられる。

『総合日本民俗語彙』では「タクラタ」を「馬鹿げたこと」とし、各地の事例を紹介した後、「北海道室蘭地方で、馬鹿者をタ克蘭ケ・タカラモノというのも同系の語であろう」としている〔民俗学研究所編 一九五五b 八五六頁〕。また、「オタカラマンチン」の項では、「福岡・熊本県の県境には、人が小児をあやす折の言葉にオタカラマンチンというのがある。このオタカラは実は別にもう一つの意味があつたので、一方は愚かなものの意、土地によってタカラモノというのはタクラタとかオタクラという語をわざと少し変えて使っていたので、子供はそれを少しも知らず、親達もまた心づかずに使っていた者があつたらう。」〔民俗学研究所編 一九五五a 二五二頁〕と述べている。

つまり、民俗学研究所では、「オタカラ」や「タカラモノ」をタクラタ系統の語彙と理解していた、といえる。

このようなことを考慮に入れた上で、芝の『福子の伝承』の発想のもとなった、雑誌『草の実』に投稿された、「ある母と子の記録」を検討してみよう。この投稿では、「障害」のある子を持つ投稿者に向けて、新潟県の「小母さん」が、「あんな子はお、宝子というのお。」と語っている。そして「そんな子を大切にする家は昔から栄えるということだよ。」と付け加える⁽¹⁹⁾。

「宝子」という語彙が、「たくらた」という語彙の意をはらんでいた可能性があること、方言として「家の厄介者」の意を持つ地域があることを確認したが、この事例からは、その語義が一般語として浸透している場所では、「宝物」（『大切なもの』）の意に引き寄せた解釈が生まれる余地があつたことがわかる。「蔑称がコンテキストを失い、あるいはコンテキストが異なる解釈を受ければ、それはもはや蔑称でも差別語でもなくなり、逆にほめことばに転化することさえある。」〔田中 一九九七 五一頁〕ことを示すものといえよう。

⑥「福虫」をめぐる文脈

『福子の伝承』の中では、「福子」、「宝子」に次いで「福虫」という語彙が挙げられている。事例としては、岐阜県大垣市、愛知県名古屋、滋賀県甲賀郡（現甲賀市）、守山市、京都市、大阪府堺市、奈良県大和郡山市、生駒郡、兵庫県尼崎市、同県水上郡（現丹波市）、同県津名郡（現淡路市）、丹波地方、福山地方の例が報告されている〔大野・芝 一九八三 八五～八七頁〕。岐阜、愛知に一例ずつ報告がある他は近畿圏に報告が集中している。

それらの語義のうち、このような人物が経済的な豊かさをもたらす（滋

賀県守山市)、とか、よく働く(大阪府堺市、奈良県大和郡山市、兵庫県津名郡(現淡路市)という事例がある。このような語義は、「福子」でも二例(山梨県西八代郡、愛媛県新居浜市)、「宝」と関わる語で四例(山形県上市市、栃木県下都賀郡、新潟県三条市、山梨県西八代郡)事例が挙がっている。これら九例のうち、それらの人々を単身者とする例は六例である(大野・芝 一九八三 八五～八七頁)。

『福子の伝承』で紹介されている兵庫県津名郡(現淡路市)の事例は、西郊民俗談話会の席上で筆者が芝に提供した事例である。

一九八三年一月一六日の西郊民俗談話会での芝の発表を受けて、筆者は、一九〇六年(明治三九)生まれの祖母に「フクゴゆうて知つとおか。」と尋ねた。祖母はその語彙を知らず、その語彙から連想して「おお、フクムシ(のこと)か。」と答えた。祖母によれば、フクムシと呼ばれるのは、聾啞者や「知恵おくれ」と呼ばれるような人で、祖母のことばによれば、「オシは何も言わんと黙ってよ働くから、アホは力持ちが多いから」労働力のたしになると語っていた。祖母は、別の機会には「福の神はアホを嫌わん。」とも言い、労働力のたしにならない場合も存在自体が福を呼ぶとも考えていたようである。

『福子の伝承』の中で紹介されている奈良県大和郡山市の事例では、

年をとつても結婚せず、分家もしないで、本家の世話になつてい
る男で、農作業などを一生懸命にしている人のことを「あの人によ
う、精出しはる、フクムシや」と現在でもいう人がある(大野・芝
一九八三 四七頁)。

と書かれている。

ここでは、「障害」の有無は問題になっていない。独立して生計を営むことのない人が、家の経済の一端を担うことによって、フクムシの呼

称を受けている。

この事例は既に芝が指摘しているように、オジ、オバと呼ばれる、単身者の存在が反映していると考えられる。オジとは本来、家の次三男を指し、オバとは、長女以外の娘をさした。このような存在が、家の経済を左右する場合があった。

竹内利美は、天竜川中流の山間地帯、木曾・飛驒の山村地帯の事例を挙げながら、「オジ・オジボー・オツアマ(男)、オバ(女)などと呼ばれて、家長のもとに終生を生家に働き通し、独身のままいわば『飼いきれし』にされる傍系家族が、大正期ころまではかなりあったことは、すでに知られている」として、それらのものの異称に「福の神・タカラオジ・馬のアニイ」というものがあつたこと、その理由として、「生前はその労力を無償で使役しえ、死後はその私財を取得することができから」としている。また、「オジが三人いれば家運が立ち直る。」といった言い習わしを紹介している(竹内 一九五九 七九～八〇頁)。このような存在を家の「蓄財」と結びつけて語る語り方は既に存在していたといえよう。

芝が事例として挙げている山形県上市市のタカラモノ、新潟県三条市西大崎のタカラオジの例では、回答者は、これらの人が分家独立しない理由を「やや社会的能力が乏しく」「少し知恵が足りなくて」などと説明している(大野・芝 一九八三 五〇頁)。

分家独立をしない傍系家族を、何らかの「障害」と関連づけて記述している例として、桜田勝徳の一九四〇年の静岡県賀茂郡仁科村浜(現西伊豆町)の調査報告がある。桜田は、安政三年(一八五六)生まれの男性から次のような話を聞いている。

舎弟が独身で何時までも兄の家にいるとオンジイになる。女房を持つと別家する。つまり妻帯の有無が別家とオンジの境となつてい

る。オンジになるのは別に馬鹿とは限らぬ。女に何か関係出来ぬ欠陥がある者がオンジとなる。オンジは家の福の神だと言われた「桜田 一九八二・二六頁」。

しかし、これらの人々が「障害」によって、生家で一生を過ごしたもののなかどろかは検討の余地がある。

家の奉公人もまた家の「福」と関わるという事例がある。京都女子大学説話文学研究会がまとめた『美方・村岡昔話集』には、兵庫県の但馬地方にあたる美方郡美方町（現香美町）茅野の昔話「正月の裸踊り」が収録されている。その中に「福虫」の語がある。

大きな家の旦那が正月の休みに奉公人に暇を出し、妻とともに裸参りをして、「大ぼがぶらぶら」などと唱えていたのを、縁の下で隠れて見ていた奉公人が、「小ぼうまでぶらぶら」と言っ出てゆくと、旦那が、「なんちゅうええことを言ってくれるだ。まあおめえは。そのくりやいええこと言ってくれるだったら、こんな家の跡とり、この男衆においたるけど、なってもらって、こんな家の福虫になってくれ」と言う（傍点は引用者）（京都女子大学説話文学研究会編 一九七〇・二四〇頁）。

ここでは、「奉公人」という外部から家に参入した者が、「家にずっと居る存在」となることで「福虫」となることを期待されている。先に見た、一生を生家で送るオジ、オバたちも、「家にずっと居る」存在であることにはかわりはない。家の娘や次三男、奉公人も、一定の時期を経ると、本来は家から析出されるべき存在であった。竹内利美は、家族内での主従的な身分関係によって労働力を提供するオジ、オバと、同居して生活する奉公人とは大きな差はなかったとみている（竹内 一九五九・八二頁）。オジやオバや奉公人として一生を未婚で終える者を「福」や「宝」に類比して捉える捉え方は、「家に留まる」という性質から派生したものであったといえるのではない。

ここで「はじめに」で示した筆者の視点にもう一度立ち返ってみたい。「福子」や「宝子」といったことは近代以降の社会的な少数者をめぐる制度やまなざしの変遷史の中で考えるべきである、と述べた。そうであるならば、「障害者」を大切にする言葉」として浮上してきた語彙が、どのような人々を指してきたか、を問うことは、私たちはどのような存在に新たに「障害者」というレッテルを貼ってきたのか、が問われることになる。

単身者として一生を終えることに、心身の「障害」が結びつけて観念される背景には、これらの習俗が忘れられ、奇異なものとして人々の目に映じるようになったことと、心身の「正常」を結婚の要件とする結婚観の浸透が考えられるであろう。このような結婚観は、一九一〇年代から、子どもを「よく」産むための方法として奨励され、一九四〇年代からは国民優生法の下に奨励された「優生結婚」の思想として跡づけられる。一九四一年以降、厚生省内に設置された国民優生聯盟は、心身ともに健康な人を配偶者を選び、結婚前には健康証明書を交わし合うことなどを記した「結婚十訓」を示し、それにながう優秀な結婚をした者を表彰し、祝い金を出し、結婚資金の貸し付けを行うなどの啓発活動を行った。²⁰

芝の「福子」の調査は、ある語に付着していた漠然としたイメージを「障害者」という名の下に再編成することになった。「障害のある子」を「大事に育てよう」という心の現われ」と規定した「福子」の調査は、フクムシ、タカラオジ、福の神などの異称を持つ、失われていくこうとしていた単身者の記憶を呼び寄せるものとなった。これは、両性の合意に基づく結婚を価値とする、戦後民法の家庭観からは遠く離れた「家」の記憶であったといえる。「排除」に抗することばとして設定された「福子」ということばが別の種類の「排除された者」を呼び寄せた結果であったのは皮肉なことと言わねばなるまい。

このような経過を知ること、実は、「障害者」ということば自体が、人々のさまざまな属性を消し去って、「できあがったステレオタイプ、紋切型の特徴を共有される」とするグループに、その名称のもとに、ある個人を強制的に所属させてしまうという、言語エネルギーの特殊な形である²⁾」ことに気づかされることになる。

まとめにかえて

芝がアンケートという手段で採集した事例には、二重の時間が刻まれていた。それは、語られている「現在」と、そのことばを聞いた「過去」の時間である。芝の採集した「答え」は、「伝聞」の際のコンテキストから離脱した「発話」であつた可能性が高いことは既に見てきた通りである。「福子」や「宝子」ということばは、ある意味で、身も蓋もないことを自分たちに受け入れやすいように語り直してきた、その積み重ねの上に成立した語であるといえる。

また、『福子の伝承』を批判する論攷が書かれた「時間」にも注意しなければならない。『障害者』に対する偏見を露呈し、かつ『障害者』への過去の不当な扱いを隠蔽する語り（香西 一九九九 一〇二頁）と香西が批判する時、一九九九年段階の自己の人権感覚を所与のものとし、それらが獲得されてきた感覚であることを疑っていない。「福子」ということばにおいては、当事者である子ども自身は疎外されており、「家」の「福」のために存在が認められているだけだという批判は容易に成り立つであろうが、このようなことばもまた、歴史的な変遷の中にあることを忘れるべきではない。

「障害」を持つ子どもの親に第三者が投げかけることばとして現在効力を持つのは、「（障害）を持つ」子どもが（大切に育ててくれる）親を選んで生まれてくる」というものである。このことばの生成について

筆者はまだ精査していないが、筆者が最初にこのことばを『産経新聞』の投書で読んだのが、一九七九年であり、その後も二〇〇三年九月二五日発行の女性誌『クロワッサン』第二七巻一八号の「読者の手紙から」、二〇〇四年六月二日放映、日本テレビ系ドラマ『光とともに…自閉症児を抱えて』など、メディアの中で散見されるようになった。「家」を価値とする「伝承」ではなく、親と子の関係がより重視されている点には注意を要する。

芝の広めた「福子」の語義は、今日では広く浸透した。一九九〇年七月六日の朝日新聞東京地方版、埼玉版によれば、一九八九年に埼玉県南部で発足した、障害者の社会参加の拠点を町中に造ることを目指す会の名称は、「福子センターをつくる会」であつた。

『福子の伝承』は、各地にさまざまな文脈で発話されていたことばを同一の語義に再文脈化した。この語は、国際障害者年以降の「障害者」をめぐる意識の変革期にあたつて、マス・メディアなどにも引用され、芝がもくろんだ以上に浸透したといえる。「民俗」や「伝承」を「古きよきもの」とする漠然とした意識が人々にあり、芝は、あえて、その「幻想」に乗ったといえる。そして、本書を引用したあまたの民俗学者もまた、このもくろみに手を貸してきたといえるのである。

表2 「福子」を考えるための年表

1801—1803	福助江戸で流行・七福神の流行（『享和雑記』）。
1804	振鷺亭著「叶福助略縁起」
	南仙笑楚満人著「叶福助話」
1805	南仙笑楚満人著「叶福助出世縁起」
	十返舎一九著「鬼外福助噺」
1873（明治5）	東京府違式註違条例「醜体ヲ見世物ニ出ス者」禁止。
1874	東京府知事布達「不具之物等見世物ニ差出」ことを禁止。
1877・12・10	『仙台新聞』に四郎の記事
1878・10・18	『仙台日々新聞』に四郎の記事
1881・6・23	『陸羽日々新聞』に四郎の記事
1884	高橋義男『日本人種改良論』優生学的な言説が注目を集める。
1885	福沢諭吉「日本婦人論」
1887	大日本私立衛生会「衛生参考品博覧会」開催。
1892（明治25）	はなのや 花廼舎静枝著『大丸騒動綾錦都乃花衣』 大阪で出版。 あやにしきみやこのはなぎぬ
1895・8・7	『奥羽日々新聞』に四郎の記事「同人が舞込めば商売が繁昌する」
1900	「福助足袋」商標へ。
1906～1912	この頃人種改良や優生学をめぐる議論が盛んになる。
大正初期頃	佐賀県伊万里郷土研究会会員が伊万里市でフクゴについて聞く①。
	兵庫県氷上郡氷上町の回答者が祖母よりタカラゴ、フクムシについて聞く①。
1917（大正6）	仙台的写真屋、四郎の絵はがきを売り出す。「仙台四郎」と命名。
1925年頃	民俗学者武田明氏が香川県多度郡中田町でフクゴについて聞く①。
大正末期頃	徳之島郷土研究会会員が、徳之島本町亀徳在住の人から、この頃まで「知恵遅れ者」をフーグワ（福子）と呼んでいたと聞かされる〔松山 2001〕。
1926年頃	回答者の母親が栃木県下都賀郡壬生町上田で、知恵遅れでよく働く人をオタカラと呼んでいるのを聞く①。
1928	柳田国男「笑の文学の起源」『中央公論』第43巻9号
1935（昭和10）	母子愛育会産育習俗調査。
1935～1945	広島県豊田郡在住の回答者が、母親から豊田郡本郷町でフクゴについて聞く①。
	京都市中の町内でフクムシ、フクスケ、フクムスメということばを使っていたのを京都市在住の回答者が聞く①。
1938年頃	尼崎市教育委員会勤務の回答者が兵庫県尼崎市園田地区で祖母よりフクムシの話聞く①。
1939年	小島勝治が近畿地方の事例を基に「福子」を『浪華の鏡』4巻2号に発表〔小島 1984〕。
1939年頃	神戸市のある下駄屋に足のたたない、言葉の分からない子どもが生まれ、「障害」が分かったとたんに店が流行り出し、この頃には界限でも評判の店となる〔高田 1943〕。
1940年以前	大阪府堺市新家町で回答者がフクゴについて聞く①。
	近畿文化会の会員が大阪市北区、奈良県大和郡山口市でフクゴ、フクスケサンについて聞いていた①。
1940	柳田国男「たくらた考」『科学ペン』5-1号、科学ペン社「馬鹿は明治に入ってから、非常に流行した単語のやうである」
	国民優生法公布（1948年まで。）
1941	柳田国男「日本の言葉」『創元』創元社 馬鹿についての考察。
1943	柳田国男「序」高田十朗『随筆民話』桑名文星堂 柳田の序文
1945	優生保護法公布（1996年まで）。
	柳田国男『笑の本願』自序〔12月〕「私の意見では、ヲコといふ言葉をやや粗暴にしたのが、此頃よく耳にするバカといふ一語だと思ふ。さうしてちゃうどこの母音変化した頃から、バカといふ語の内容も少しづつ、かはつて来て居るのである。出来ることならば其の意味を本に復して、人を楽しませるといふ運動を一つの目標として見たい」

1945	西讃岐では「チョウチンゴやホッコ（白痴）」をフクゴといって大事にする〔和気周一「マエボトケとフクゴ」『民間伝承』18巻1号〕。
	仙台市在住の投稿者が別府のホテルで「障害」を持つ子を「家の宝」として大事に育てているのを見聞する。経営難だったホテルはその子が生まれてから上向きになったという〔1992年11月8日『産経新聞』投書〕。
1945年頃まで	広島県世羅郡在住の回答者がタカラゴについて聞く①。
	広島県呉市阿賀中央の回答者が「障害者が生まれた家は栄える」と聞く①。
	秋田県中央児童相談所の職員がこの頃まで大館市の商家で「たからもの」「さじかりもの」と言っていたのを聞く①。
1947（昭和22）	児童福祉法制定（18歳未満の障害児政策）。
	柳田国男「ヲコの文学」『芸術』3号、八雲書店「ヲコがもと是ほどにも世を楽しくする技芸であったとすれば、どうして又今日のような、人のいやがる馬鹿にまで成り下がつたらうかということが、愈々問題とならざるを得ないであらうが、私には是を解決するちとばかりの用意がある。一言でいうならば、人生に余裕がなくなったのである」
	この頃よりも前に笹谷良造が、大和五条で「白痴が生まれると家が栄える」といっていやがらなかった」と聞く〔笹谷良三「幸福をもたらす白痴」『民間伝承』17巻1号、1953年に掲載〕。
1949	児童福祉法制定。
1950	精神衛生法成立。
	愛媛県新居浜市在住の回答者の家では、この年に亡くなった伯母をフクゴと呼んでいた①。
1952	優生保護法第3条「改正」「遺伝性のもの以外の精神病又は精神薄弱」が、新たに断種対象に加えられる。
	中絶の審査をする「地区優生保護審査会」を廃止し、中絶は全て指定医師の認定で可能になる。
	「優生結婚相談所」の名称を「優生保護相談所」に変更し、都道府県等に設置を義務づけ、その費用国庫が補助する。
1953	笹谷良造「幸福をもたらす白痴」〔『民間伝承』17巻5号〕が掲載される。
	滋賀県高島郡本庄村では、盲目の子に「福がついている」と言った。また、鮫肌の子を占ってもらおうと「福の神がついている」と言われた〔橋本鉄雄『民間伝承』17巻7号〕。
	山形県置賜地方では分家させられない兄弟姉妹を「宝オジ」「宝オバ」と呼んでいるという報告「宝おじと宝おば」が掲載される〔武田清澄『民間伝承』17巻7号〕。
1955	月刊誌『福助世界』創刊〔木村 1994〕。
1957	昇地三郎『しいのみ学園』、福村出版。「郷里山口県岩国地方では、不具の子やばかの子ができるとその家は栄える、そういった子は『家の宝』であると年寄りなどが言っている」。
1960	精神薄弱者福祉法制定。
1960年代	坪郷康、児童福祉に携わっていた頃に精神薄弱児の親から「福子」について聞く〔坪郷 1984〕。
	広島県尾道市百鳥町の回答者が近所の人から寝たきりのわが子によって家が栄えると聞く①。
1965年	佐藤首相の私的諮問機関である社会開発懇談会は重度障害者の「大量収容施設」を各地に建設するコロニー構想を唱える〔7月〕。
1965年頃	坪郷康、山口県萩市大島槌蔵氏より「福子」の伝承を聞く（大島氏は母堂より）〔坪郷 1984〕。
1965	「福助足袋」、商標を「フクスケ」へ〔木村 1994〕。
1967年以降	自治体や民間によって地方コロニーが建設される。
1970	心身障害者対策基本法公布。
1971	社会福祉施設緊急整備五か年計画実施、「重度障害者」の「大量収容施設」建設へ。
1972	「田舎（新潟県…引用者注）にいた頃」「村の小母さん」から「宝子」のことを聞いた〔『草の実』176号、7月7日〕。
	『草の実』176号の記事が「宝子と呼ぶところ」と題して紹介される〔10月3日 朝日新聞（夕刊）「標的」欄〕。
	娘がダウン症と分かった富山市在住の女性が、父親から「宝子」について書かれた朝日新聞の切り抜きを受け取る〔1999年1月26日 朝日新聞（朝刊）〕。
1974	雑誌『愛護』知的障害者親の会の誌上座談会でノーマリゼーションということばが使われる〔花村 1994〕。
	河野勝行氏が「福助」の説明の際に「いわゆる福子思想」について言及する〔河野 1974〕。
1975年頃	広島県豊田郡本郷町（現三原市）の回答者が実践倫理宏正会の会員より、障害のあるわが子を「家の宝」と言われる。

1980	渡部昇一『週刊文春』〔10月2日号〕に「劣悪遺伝子の子を生まないことは社会に対する神聖な義務」と書く。大西巨人の反論〔『社会評論』29号〕。
1981	国際障害者年。芝正夫「福子思想」を『昔風と当世風』22号に発表。 「幸福をもたらす子に希望」と題して「宝子」についての投書が掲載される〔11月19日 朝日新聞（朝刊）「ひととき」欄〕。
1983	西郊民俗談話会で芝正夫「福子の問題」を発表〔16日〕 芝正夫、福子・宝子のアンケートを実施〔2月初旬～3月初旬〕。 坪郷康、「福子」と類似の障害者親のアンケートを実施〔4月〕〔坪郷 1984〕大野智則、芝正夫両氏の著書『福子の伝承—民俗学と地域福祉の接点から—』刊行〔7月〕。
1985	早稲田大学教授・養護学校校長が「神戸の友人」から聞いた「神戸の県会議員」の話として「福子」の伝聞を『愛育』1月号に投稿。
1989	埼玉県南部地区で、障害者の社会参加の拠点を町中に造ることを目指す「福子センターをつくる会」発足〔1990年7月6日 朝日新聞東京地方版、埼玉版〕。
1992	福助株式会社への要望、「社名変更ないしイメージチェンジ」（全国企業認識度調査『会社は評価される』毎日新聞社広告局）〔木村 1994〕
1992・11・8	産経新聞「談話室」欄に別府市のKホテル「家の宝」の紹介が掲載。
1993	「心身障害者対策基本法」改正「障害者基本法」へ。
1996	「優生保護法」改正「母体保護法」へ。

大野智也・芝正夫の『福子の伝承』のアンケート調査の回答によるものは①と付した。
聞き書きの資料は、聞いた時期が分かるものはそれに従って、年表に入れた。地名は、文献初出時のもので示し、現行の市町村名とは異なるものもそのままにした。

註

- (1) 芝正夫遺稿集刊行会の編集委員は浅野均、津山正幹、長沢利明の各氏である。
- (2) 法律上の表記としての「精神薄弱」ということは、一九九九年四月から「知的障害」へと改められた。このことばの孕む問題については玉井弘幸「再び『精神薄弱』という用語について」『発達』二〇〇八号「特集『精神薄弱』から『知的障害』へ」(一九九九年八月 ミネルヴァ書房)を参照のこと。
- (3) 古々路の会は一九七三年一月一日に会誌『昔風と当世風』創刊号を刊行している。芝正夫の遺稿集は、この会の会員である津山正幹、長沢利明らによって編まれたものである。
- (4) 「父親が娘を殺す話」(一)～(六)を『昔風と当世風』第一六号(一九七九年)から第二七号(一九八二年)まで断続的に掲載。
- (5) 芝正夫「中山太郎著『日本民俗学辞典』の復刻」『昔風と当世風』第二四号(一九八一年)
- (6) 「精神薄弱の子を持つ親の手記の中に、その子を指して『福子』『福虫』『宝子』などといっていることがよくある」として、東京・大塚養護学校桐親会会報や雑誌『草の実』への投稿記事を紹介している〔芝 一九八二〕〔山田 二〇〇九〕
- (7) 津山正幹「福祉民俗学の夢」〔芝正夫遺稿集刊行会編 一九九三〕二〇四頁
- (8) 笹谷良三「幸福を齎す白痴」『民間伝承』一七巻第五号、一九五三年 一一頁
- (9) 柳田國男「たくらた考」『科学ペン』五巻一号、科学ペン社、一九四〇年、『柳田國男全集』第一九巻 筑摩書房 一九九九年 六四二頁。同様の表現は、一九二八年『笑の文学の起源』(『中央公論』第四三巻第九号、中央公論社、『柳田國男全集』第一五巻、筑摩書房、一九九八年、一六七頁)にも記載されている。
- (10) このコメントは、一九五六年に胎児性水俣病患者として生まれ、一九七七年に生涯を終えた上村智子さんを母親が「宝子」と呼んでいたことを指すと考えられる。
- (11) 写真家のユージン・スミスが一九七一年に撮った「入浴する智子と母」は、写真集『MIZUMATA』で、水俣を象徴する写真として世界に知られるようになった。その後、「宝子」は、患者の救済を訴える運動においては、胎児性水俣病患者をさすことばであると同時に生命を慈しむことばとして象徴的に使われた。
- (12) 上村さんが「宝子」と呼ばれた背景は『朝日新聞』二〇〇〇年三月一三日西部夕刊「水俣病『宝子』の写真、ふびんと封印 撮影のスミスさん」を参照のこと。
- (13) オジ、オジボウズとは、分家独立して家を構えることがなく、一生を生家で送る、次三男のこと。詳細は本文に後述。
- (14) ノーマリゼーションとは、障害者に、すべての人がもつ通常の生活を送る権利

を可能な限り保障することを目標に社会福祉をすすめること。デンマークの知的障害者福祉の取り組みから生まれた理念で、バンク・ミケルセンが提唱した〔花村 一九九四 九七頁〕。

〔わが国で「ノーマリゼーション」という語が文献等に初めてみられたのは、おそらく一九七四年の『愛護』という知的障害者親の会の誌上座談会からだろうといわれています。〕しかしバンク・ミケルセンについては、一九七八年に、彼の論文『The Principle of Normalization』（ノーマリゼーションの原理）を四国学院の中國康夫教授が訳し、その中で略歴を紹介したのが初めてでしょう。〔花村 一九九四 九七頁〕

(13) 「河北新報」は東北六県を発行エリアとするブロック紙。発行部数は朝刊が約四九万部、夕刊が約一〇万部、宮城県内でのシェアは約六八%（二〇〇八年三月一日現在）〔河北新報〕HP <http://www.kahoku.co.jp/com/pg08.htm> 二〇〇九年二月四日検索。

(14) 一八七七年（明治一〇）二月一〇日号の『仙台新聞』が初出の、仙台の有名な知的な「障害」があるが、仙台の人々に厚遇されのちに福の神とされた（大島 一九九五）〔清水 一九九七〕（山田 二〇〇九）。

(15) 坪郷康が一九八三年に全日本精神薄弱児育成会一九〇団体対象に実施したアンケート調査では、二例を「福子」とそれに類似する事例と認めている。坪郷は、この調査では、「障害のある者」を大事にする、という伝承と受け取れるもののみをカウントしている〔坪郷 一九八三〕。また、一九七七年頃から、山口県下で一〇〇〇名を対象に面接調査・アンケート調査を実施したところ、山口県阿武地方と萩市地方にのみこれらの「伝承」が知られており、その回答者は五二名であった。この調査の結果から、一九八三年に山口県阿武地方、阿武郡連合婦人会総会出席者一五二名を対象にアンケート調査を実施したところ、三三名がこの伝承と、それに類似するものを知っていたという〔坪郷 一九八三〕。

(16) 芝は、商家と「福子」の結びつきに恵比須信仰との関連を考えていた（一五二頁）。

(17) 説話伝承学会二〇〇三年例会（二〇〇三年九月一三日、於…キャンパスプラザ京都）「単身者の民俗―新しい『福子』論に向けて―」発表後のご教示による。

(18) 日本国語大辞典刊行会編『日本国語大辞典』第二版、第八巻、小学館、二〇〇三年

(19) 平上まさ「ある母と娘の記録」草の実刊行会編『草の実』一七六号、一九七二年七月七日、三一頁

(20) 岡部美香『優生結婚』という思想―大正期・新中間層の産育観とこれを規定する知の枠組みについて―、高木雅史「国民優生法下の優生結婚―「結婚十訓」をめぐる―」〔藤川 二〇〇八〕

(21) 〔田中 一九九七 五一頁〕による「差別語」の定義

参考文献

- 荒俣 宏 『広告図像の伝説』平凡社、一九八九年
- 栗野 邦夫 『福の神仙台四郎のなぞ』ワッドクラフト、一九九三
- 稲田浩二・小沢俊夫編 『日本昔話通観』一六巻、同朋舎、一九七八年
- 後小路 薫 『近世説話の位相―鬼策債譚をめぐる―』井上敏幸・上野洋三・西田耕三編『元禄文学を学ぶ人のために』世界思想社、二〇〇一年
- 大島 建彦 『仙台の「福の神」―西郊民俗談話会編・発行「西郊民俗」一五三号、一九九五年
- 大野明子編著 『子どもを選ばないことを選ぶ』メディア出版、二〇〇三年
- 大野智也・芝正夫 『福子の伝承―民俗と地域福祉の接点から―』堺屋図書、一九八三年
- 大野智也・馬場一雄 『対談』福子・たから子『小児内科』一七巻四号、東京医学社
- 大室 一宏 『障害児処遇に関する民俗学的考察序論』『近畿民俗』一一九号、一九八九年
- 奥村 寛純 『大文字屋福助考―郷土玩具文化研究会「郷土玩具」二〇号、一九八九年
- 小浜 逸郎 『弱者』とはだれか』PHP選書、一九九六年
- 恩賜財団母子愛育会編 『産育習俗資料集成』第一法規出版会、一九七五年
- 鹿野 政直 『健康』の時代』『朝日百科日本の歴史別冊 歴史をよみなおす 二三 桃太郎さがし―健康観の近代』一九九五年
- 鎌田 久子 『異端の民俗』『悠久』八号、鶴岡八幡宮、一九八二年
- 川添 裕 『江戸の見世物』二〇〇〇年 岩波書店
- 木村 元 『商神「福助」の心性史的考察―障害児教育史への一視点―』中内敏夫他編『企業社会と偏差値』藤原書店、一九九四年
- 京都女子大学説話文学研究会編・発行『美方・村岡昔話集』一九七〇年
- 小池 淳一 『町・職人・統計―小島勝治論序説』小池淳一編『民俗学的想像力』二〇〇九年、せりか書房
- 香西 豊子 『福子』の誕生―資料操作と民俗―『日本民俗学』二二〇号、一九九九年
- 高達奈緒美 『仏頂心陀羅尼経』のなかの討債鬼説話』『近世民間異聞怪談集成』月報五、二〇〇三年、国書刊行会
- 古河 三樹 『見世物の歴史』雄山閣出版、一九七〇年、『図説庶民芸能―江戸の見世

物』と改題、新版 一九九三年	日本国語大辞典編集委員会編『日本国語大辞典』第8巻 小学館、二〇〇三年
国学院大学民俗文化研究会OB有志編『学生研究会の五〇年―フィールド・ワークの記憶と記録―』国学院大学説話研究会 二〇〇六年	野沢 謙治『写真に撮られた異人―仙台の「しろばか」―』『日本民俗学』一九七号、一九九四年
小島 勝治『福子』一九九三年『統計文化論集Ⅲ』未来社、一九八四年	橋本 鉄男『盲と福の神』『民間伝承』一七巻七号 一九五三年
桜田 勝徳『桜田勝徳著作集』第七巻『未刊探訪記Ⅱ・回想録』名著出版、一九八二年	花村 春樹『「ノーマライゼーションの父」N・E・バンク・ミケルセン―その生涯と思想―』ミネルヴァ書房、一九九四年
澤口 正胤『日本足袋文化史―福助足袋の由来と現況―』『同盟時報』同盟通信社、一九四九年二月号	藤川信夫編『教育学における優生思想の展開』二〇〇八年 勉誠出版
芝 正夫『なぜ「福子」なのか―民俗学者等へのアンケートを中心に―』福祉教育研究会編『わかるふくし』五二号、一九八三年	藤沢 衛彦『明治風俗史 下』一九四二年 三笠書房
芝 正夫『福子思想その他―精神薄弱者と民俗についての覚え書き―』古々路の会編『昔風と当世風』一二二号、一九八一年	町田 忍『福助さん』青山隆史『開運―招福縁起大図鑑』ワールドマガジン社、一九九七年
芝正夫遺稿集刊行会編『父親が娘を殺す話―女人犠牲譚から福祉民俗学へ―』岩田書院、一九九三年	松本 明『弘前語彙』弘前語彙刊行会、一九八二年
清水 大慈『社会的弱者の聖化の研究―仙台四郎伝承の発生と展開を中心として―』『日本民俗学』二一七号、一九九九年	松原 洋子『日本―戦後の優生保護法という名の断種法―』米本昌平ほか編『優生学と人間社会』講談社現代新書、二〇〇〇年
高田 十朗『随筆民話』桑名文星堂、一九四三年	松山 光秀『シマの諺にみる「魂」の系譜―知恵遅れ者の場合を通して―』『徳之島郷土研究会報』第一七号、徳之島郷土研究会 二〇〇一年二月
高塚 明恵『福子の思想』國學院大学説話研究会編『民族文化』一九九九年号、一九九九年	民俗学研究所編『綜合日本民俗語彙』第1巻、平凡社、一九五五年a、第2巻、一九五五年b
竹内 利美『奉公人・雇い人・徒弟』『日本民俗学大系 社会と民俗Ⅱ』一九五九年 平凡社	柳田 國男『柳田國男全集』第一九巻、筑摩書房、一九九九年
武田 清澄『宝オジと宝オバ』『民間伝承』一七巻第七号、一九五三年	山懸三千雄『特集「物」より心の時代を迎えて 私からも一言 福子の思想』『愛育』五〇巻一号、一九八五年
田中 克彦『差別語入門』『小説「RUBBER」』一九九七年秋季号、朝日新聞社	山田 巖子『因果応報譚のなかの子ども―富との関わりを中心に―』『紀要』十一号 東洋大学附属牛久高等学校、一九八八年
千葉徳爾・大津忠男『間引きと水子―子育てのフォークロア』農山漁村文化協会、一九八三年	山田 巖子『子どもと富―「異常児」をめぐる「世間話」』『国立歴史民俗博物館研究報告』五四号、一九九三年
堤 邦彦『江戸怪談と富』広島近世文学研究会編『鯉城往来』二二号、広島大学文学部、一九九九年	山田 巖子『見世物のケツカイ』『弘前大学国語国文学』二四号、弘前大学国語国文学会、二〇〇三年
堤 邦彦『経済営為と因果応報譚―鬼策債から「こんな晩」へ―』『胎中の鬼―復讐する子供たち』堤邦彦『江戸の怪異譚』二〇〇四年、ベリかん社	山田 巖子『民俗と世相―「烏計なるもの」をめぐる―』小池淳一編『民俗学的想像力』二〇〇九年、せりか書房
坪郷 康『障害児観「福子」の伝承』『山口女子大学研究報告』九号、一九八四年	和気 周一『マエボトケとフクゴ』『民間伝承』一八巻第一号、一九四五年
津山 正幹『芝正夫の業績』法政大学人類学研究会編『法政人類学』四八号、一九九一年	
津山 正幹『福祉民俗学の夢』〔芝正夫遺稿集刊行会 一九九三〕	
中市 謙三『野辺地方言集』野辺地町方言を語る会、一九九九年	
生瀬 克己『障害者と差別語―健常者への問いかけ』一九八六年、明石書房	
西田 耕三『縁起と文脈』日本文学協会編・発行『日本文学』七号、二〇〇六年	

Vocabulary and Context of Minorities : Masao Shiba and *Fukugo*

YAMADA Itsuko

The tradition of *fukugo* and *takarago* a child with disability brings the family a fortune was brought into folkloric discussion by Tomoya Ono and Masao Shiba. This “tradition” has hardly been described before their work. Therefore, on the occasion of the International Year of Disabled Persons in 1981, it was criticized as a “reinterpreted folklore.”

In the paper entitled “Folklore and Social Conditions : Over the word *oko*,” this paper argues that such “reinterpretation” of the word had already taken for granted parents of “children with disabilities” in 1970. Thus, we should rather discuss the change of recognition by which such a word became visible as a “tradition” and regarded as something worth mentioning.

This paper presents the background of the studies of Masao Shiba, who is one of the authors of the book. Shiba was a student member of the folklore society at Toyo University and took a job in the welfare of handicapped persons after graduation. He learned about the words *fukugo* and *takarago* from the notes of the parents of children with disabilities. While knowing the negative meaning of those words, he tried to resuscitate them as words that enable people with disabilities to live normally in local communities. As a result, he presented those words to people as “wisdom of people in the past” and “tradition.”

Next, this paper studies the context in which the words *fukugo* and *takarago* were placed before they were labeled as a person with disability. It shows that the words that gathered under the concept of a “person with disability” had the meaning of a “fool,” a “useless person,” and a “person who cannot be independent from parents,” and that they belonged to a different category from a “person with disability.”

By clarifying the above, this paper shows the following: [1] A figure (Masao Shiba) who used the framework of “tradition” and “folklore” strategically to attain his purpose became involved in the formation of the folkloric “knowledge”; [2] By the change of recognition over the “person with disability,” the words that belonged to a different category in the past lost their former context and were placed in a new context.

Key words: Vocabulary, *Fukugo*, Person with disability, Single person, Minority, New context
